

## 品川区子ども読書活動推進計画 有識者等ヒアリング中間報告2

### 1. 目的と対象

#### (1)目的

- 新しい子ども読書活動推進計画において重視する中高生の読書活動、ならびにそれに関連する電子メディアの利活用について、計画における認識や取組につながる知見を得る。

#### (2)対象

- 有山裕美子氏(工学院大学附属中学校・高等学校 学校司書)
- 鈴木佳苗氏(筑波大学図書館情報メディア系 准教授)
- 野末俊比古氏(青山学院大学教育人間科学部教育学科 教授/同大学図書館長・アカデミックライティングセンター長)
- 三鷹市立三鷹図書館職員
- まちライブラリー関係者(予定)

### 2. ヒアリング結果

#### (1)中高生の読書について

【所見】 中高生の読書を振興する上では、読書に対する考え方を広げる必要があるという認識が共通して持たれていた。また、多メディアに展開していくべきだという意見が聞かれた。「読書能力」という言葉も使われていたように、適切なメディアを利用して知識を得られるようになることが望まれていると考える。

#### 読書を広げる必要性

- 読書の目的によって範囲を再考してもよいのではないかと。本に親しむ、文学を読むことだけが読書のすべてではない。たとえば調べ物をするプロセスでの読書もあるように、読書はもっと広い活動である。映像でも、音声でも、何らかの情報を読み解く活動も含まれる可能性があるのではないかと。
- メディアが多様化しているなかであって、必ずしも本でなくてもよいと思う。知りたい情報を得るために本も含めたメディアを適切に使い、何かを知る喜びを感じる大切である。
- いまはSNSもあればメールもある。そのなかで子どもたちは話し言葉も書き言葉も様々なレベルを使い分けられており、言葉が多層化している状況である。
- そのような言葉の環境のなかで、従来の読書活動が捉えてきた読書の対象は狭いと思う。いろいろな「読書」があり、それを学ぶ必要があると考える。

#### 知るための能力を育むための読書活動

- 中高生にとって読書は、読み物を楽しむことだけではない。読み物を楽しむ読書は目的としての読書であるが、中高生にとっての読書は手段である。有効なメディアを選択して、自分の知りたいことを知るということが中高生にとっての読書である。
- 読書興味とともに、読解力から始まる読書能力をバランスよく育んでいくことが、中高生にとっての読書活動だと考える。

- 中学生の読書に関する課題は読解力である。インセンティブを設けて読書をするように促しても、読解力が上がるとは考えにくい。方法を考えないといけない。

### **中高生の生活時間と読書・図書館利用**

- 中学生になると図書館に来なくなる。スマートフォンを持つようになり、結果として読書よりも多くの時間をスマートフォンに使うからかもしれない。
- 部活動の時間が短くなっている現状は図書館に呼び込むチャンスだと思っている。交流機会など、工夫をしているところである。

## **(2)読書能力について**

**【所見】**「読書能力」については、一律に定義されるものではなく、生活や仕事の場面に適したスキルがあるという認識が示された。

- 読書習慣と言われるが、それを包含する読書能力に着目すべきなのではないか。読書能力とは、「必要なときに必要なものを読める」ということだ。つまり、生活する上で必要な「読書」ができることが望まれる。

註)たとえば法律に関わる仕事をしている人にとって必要な読む力と、教職において必要な読む力は異なる。家庭生活を送る上での読む力も異なる。生活する上で読む文書が異なることが前提となった考え方である。

## **(3)読書活動ないしは読書教育について**

**【所見】**「読書能力」を育む上では、多様なメディアに接して自分なりに情報を取捨選択することが望まれるという認識が共通して持たれていた。そのなかで、それぞれのメディアの有用性を理解しながら、本についても「役に立つ」という認識が持たれるとよいという意見があった。そのためには取捨選択のプロセスについて評価し、何が適切な選択なのかを学ぶ必要がある必要があることが指摘された。

### **読書の有用性への気づき**

- 中高生が本を読むにあたっては、子どもたちが読書をどう思っているのかを把握するべきではないか。つまり、読書の意義に対する認識である。
- 読書の意義は、子ども読書活動推進計画の下では楽しむことにあることが多いが、「役立つ」ということも重視するべきではないか。この読書が「役立つ」ということを実感できるきっかけを学校教育でつくる必要がある。
- 本が「役立つ」という実感を得ることが大切である。そのような実感があれば、何かを調べるときにインターネットだけに頼らず、本も参照するようになるだろう。

### **メディアを利用する経験の必要性**

- リーディングスキルテスト(RST)で測られる読解力と文学を読む読解力のあいだに、様々な読書能力が存在する。個々人において得手不得手があるが、大学に入るまでぐらいに体験として行い、自分の得手不得手を把握しておけるとよいと考える。
- その体験を中高生の読書活動で行うということになるが、その際には各人が情報を理解する上でどのメディアが適しているのかも考慮した方がよい。文章だけでなく、音声、映像、話し合いなど、

様々な様態があり得るので、各人が最も理解できる方法を把握できるようにした方がよい。

### **必要な環境**

- 知りたい情報を得るために本も含めたメディアを適切に使い、何かを知る喜びを感じるためには、学校図書館では様々なメディアで情報を得る準備をしておき、生徒が取捨選択できるようにしておくことが必要だと考える。
- インターネット上の情報は正確ではないと言われているが、子どもたちは見抜いているのではないか。そのインターネット上に不確かなサイトがあるのと同じく、本のなかにも不確かなものはないか。
- 現状を踏まえると、メディアと情報の両面で必要なものを過不足なくそろえた選択肢の多い環境を準備することが大切だと考える。情報の消費方法(メディアの選択)は多様であり、それらを価値づけることはできない。メディアにまともされず、「本」を広げ、「読書」を広げることが大切だと考える。

### **調べ学習の展開**

- 有効なメディアを選択できるようになるためには、生徒が考える余地を残しながらノウハウを例示することで、選択を促すことが必要である。そうすれば、生徒もやり方が徐々に分ってくる。ただし、現在の学校において、そのような指導をする人が少ないという現実がある。
- 学校においては、授業があるため、既存の活動のなかに要素を加えることが必要になると思う。そのときに公共図書館がノウハウを伝える研修を行うことは有効だろう。
- また学校における調べ学習や自由研究も改善の余地がある。多くの場合アウトプットが評価されるが、子どもが調べるプロセスが重要である。何をどのように調べたのかを把握し、それが適切・有効であったのかをフィードバックすることで、子どもは自分のプロセスをふり返り、次第にうまくメディアを選択できるようになる。
- そのような経験があれば、何かを調べるときに手軽であるからという理由でインターネットだけを参照しない。また、本や図鑑等を適切に活用できるようにもなる。

### **書き手になることの有効さ**

- 正しい情報を得ているのかという疑問もある。正しい情報を得られるようになる必要があるが、そのためには生徒が受け手ではなく書き手になることが最適な方法ではないか。
- 読書は文章を読むという基礎的な力を身につけるためには必要だと思う。ただ、日本語で自分の考えを表現することが重視されるようになってきているので、書き手になることが望ましい。
- 書く上では本やインターネットを利用する。情報手段として活用するためには、触れる経験を積むしかないと考える。

## **(4)中高生向けの取組等**

**【所見】** 中高生(特に読書をしなくなった中高生)に向けた取組の難しさは地域で変わることはない。ただし、ティーンズ向けサービスの体制や選書方針などの体制を固めた上で、子どもの読む内容まで含めて深く検討することが大切であるとする。

### **ティーンズ向け資料**

- ティーンズの選書方針はつくっている。それに沿って、ティーンズ資料の選書会を職員で行っている。最終的には担当係長と館長で決定する。
- 子どもが手に取るものであることから内容は極力確認している。

○マンガの所蔵はないが、内容的な理由ではない。マンガは本のつくりが弱いことと、刊行が続くと蔵書スペースをひっ迫するからである。

○ライトノベルは、児童書の次のステップとして多少蔵書している。ただ、図書館として提供することに疑問を感じる内容があるのも事実である。また、ライトノベルが児童書から一般書への橋渡しになるのかという疑問もある。ずっとライトノベルを読み続けるケースもあるし、読書が好きであれば橋渡しがそもそも不要だとも考えられる。

### **体制等**

○ティーンズ向けのサービスの担当は、一般書担当から1名、児童書担当から1名、兼任のかたちで配置している。一般書と児童書のどちらにもかかわる世代であることを考慮している。

### **中高生に向けた取組**

○「図書館部！」という本好きな子ども(中学生～20歳を対象)が図書館で活動する取組を続けている。同世代のティーンズに向けて、同じ目線で図書館や本のことを発信してもらいたいと思って取り組んでいる。

○毎年度部員を募集しており、例年20名前後が参加する。活動内容は、図書館フェスタへの出展とそれに向けた検討を重ねるほか、活動をPRする冊子の作成や、子ども向けのおはなし会を行っている。

○活動は基本的に子どもが相談し、自主的に決めている。子どもたちがレー小説を書くこともあるが、職員があまり手を入れない方がよいことが多い(内容のチェックは行っている)。

### **子どもの居場所**

○現在の子ども読書活動推進計画で事業として取り上げているものの、既存のスペースを活用して子どもたちが過ごせるようにしているかぎりである。十分なスペースとは言えない。